心の散歩道

私たちは、欲しいものが手に入らないといわゆる欲求不満になります。子供たちは「お母さんのケチ！」と悪たれをつき、お母さんは「お父さんの給料が少ないから」とボヤき、お父さんは「世の中が不景気だから」とこぼすかもしれません。こんな心のイライラを、お釈迦様は、求めても得ることのできない苦しみ、〈**求不得苦**（ぐふとっく）〉と説かれています。

ではもし、何でも手に入るお金持ちになれたとしたら、いったいどんな気持ちになるのでしょうか。昔、自分の生まれ育った貧しい島を飛び出して、七つの海を股にかけて貿易するほどの大金持ちになったミランという男がいました。ところがある日のこと、嵐に遭って彼の船は一夜にして海の藻屑と消え、命からがらある島に流れ着きました。さて、ミランはのどがカラカラに渇いてたまりません。そこでヤシの木に登って実をたたき落とすと、むさぼるようにその汁を飲み、「こんな美味しいものはない」と心底思いました。すると今度はお腹がすいてきます。そこで奥の森へ入って、木の実や草の実が茂っています。「うまいうまい！」と、お腹いっぱい食べました。やがてその場で、ぐっすりと眠り込んでしまいました。

ミランはその時夢を見ました。それは船一杯に積んだ宝物の中で、美女達に囲まれ、お酒を飲みながら、我が世の春を謳う自分の姿でした。ところが夢の中の彼は、それ程の大金持ちなのに、ちっとも満足していないのです。今度はもっと大きな船に、もっと沢山の宝物を手に入れてやろうと考え出します。その時です、空にまっ黒な雲が湧いてきて、みる間に大嵐となり、雷がピカッと光ったと思うと、ミランの上にドシンと落ちてきました。「助けてくれ！」自分の叫び声に目をさますと、それは眠っているミランの真上にある木から、木の実が落ちて彼の頭にゴツンと当たった音だったのです。

その時彼は、今の自分にはどんな宝も何の値打ちの無いことを知りました。それより、今落ちてきた木の実の方が、ずっと素晴らしい贈り物だったのです。「天は、金がなくなっても俺を生かしてくれている」そう悟った時、ミランはなんとその島が、昔自分が生まれた貧しい島であったことに気付くのです。

お釈迦様は、欲望を離れてこそはじめて、正しく物を見ることが出来、ものごとを正しく見ることの重要性を八正道で説かれています。　　合掌